

ドナ・ウッドの幼児音楽教育の理論と実践

——『動く、歌う、聴く、楽器』を通して——

尾 見 敦 子

Theory and Practice of Music Education by Donna Wood

— An Introduction to “Move, Sing, Listen, Play”—

Atsuko OMI

要 旨

本稿の目的は、幼児の音楽教育のカリキュラムの優れた一例を紹介することである。ドナ・ウッド著『動く、歌う、聴く、楽器—幼児のための音楽』の「第二部 音楽 The Music」に示された、彼女の幼児音楽教育の理論と実践を訳出した。ドナ・ウッド女史の、よく考えられ、計画され、準備された幼児の音楽指導は、易しくて本質的、音楽的で人間的だと感じられた。

音楽教育は「すべての幼児のための質の高い音楽経験を提供すること」であると考えている。明確な目的と目標を表明し、子どもの発達段階と音楽文化の研究に裏打ちされたカリキュラムと教授法は必要である。日本の幼児の音楽教育には、カリキュラムと教授法がそもそも欠けていると思われる。本書の紹介は、日本の現状に対する優れた「代案」になると同時に、教育に必須なこれら概念の重要さの主張につながるだろう。

キーワード：音楽教育、幼児、カリキュラム、動きと音楽、遊び歌、聴取、創造、楽器

はじめに

幼児に望ましい音楽経験はどのようなものだろうか。幼稚園・保育所で声を張り上げて歌う場面、合奏の大音響に出会ったとき、この問いが頭をよぎる。保育者はそうしないのに、子どもが怒鳴って歌ったり、騒々しくリズムも整っていない合奏をしても平気なのは、子どもの音楽性に対する保育者の認識の表れなのだろうか。それとも、保育者の音楽性の表れなのだろうか。

か。養成校の教育の問題として受け止めなければならないことは明らかである。

保育者の行う音楽指導のための養成校の教育のかなりの部分がピアノ演奏の技能の修得に費やされており、養成校のピアノ教育の研究もおびただしい数にのぼっている。しかし「保育になぜピアノなのか」という根本が議論されることはないようである。ピアノという楽器、ピアノに捧げられた芸術作品、そしてピアノ演奏家の輝かしい歴史を引き合いに出すのは気がひけるが、保育室で鳴るピアノはいったい何なのだろうか、と考えてしまう。

ISME 幼児部会セミナーや（ISME：国際音楽教育協会、その中の7つの専門部会の一つが幼児の音楽教育部会 Early Childhood Music Education Commission で、セミナーは隔年に開催）や同部会主催の現職教育特別コース（第1回が1995年、以後5年ごとに開催予定）に1992年以来参加する機会を得、他国と比較してははっきりわかったことは、日本が「特殊」だということである。フィンランド、スウェーデン、デンマーク、オランダ、ドイツ、ハンガリー、イスラエル、イギリス、アメリカ、カナダの幼児音楽教育家に出会ったが、幼児の歌をピアノで伴奏することに力点がおかれている国はなかった。

ISME 幼児部会の共通認識として、音楽教育は「すべての幼児のための質の高い音楽経験」を提供することである。セミナーに集う世界の幼児音楽教育家たちはみな、明確な目的と目標を表明し、子どもの発達段階と音楽文化の研究に裏打ちされたカリキュラムと教授法を提示していた。それらは文化の違いを越えてなお、日本の現状に対する優れた「代案」になると思われた。よく考えられ、計画され、準備された幼児の音楽指導は、易しくて本質的、音楽的で人間的だと感じられた。

本稿の目的は、幼児の音楽教育の優れた「代案」を紹介することである。ドナ・ウッド著『動く、歌う、聴く、楽器——幼児のための音楽』（Donna Wood, *Move, Sing, Listen, Play: Preparing the young child for music*, Revised Edition, 1995, by Gordon V. Thompson Music, Tronto, Canada）の「第二部 音楽 The Music」に示された、彼女の幼児音楽教育の理論と実践を訳出して紹介する。教材例の「文化的翻訳」をせず、そのまま紹介しているので、文字どおりの「代案」ではない。幼児の音楽教育にこういう考え方とやり方があるという提案である。それは日本の幼児音楽教育に欠けている、カリキュラムと教授法の概念の重要さの主張につながるだろう。

I. ドナ・ウッドと『動く、歌う、聴く、楽器』について

著者であるドナ・ウッドは、カナダのトロントにある王立音楽院を卒業し、また、トロント大学児童研究所で幼児教育者の資格を取得している。長年の実践を経て、王立音楽院に、3～

7歳児のための「音楽の予備クラス」と、両親と6～36ヶ月児のための「赤ちゃんと音楽」を創設し、発展させた。教員養成のサマーコースと学部で指導を担当した。1987年には幼児の生活の質の改善に優れた貢献をしたことに対して、オンタリオ幼児教育協会から賞を受けた。1991年には Ryerson 工芸大学幼児教育学科（継続教育部門）と王立音楽院に学際的幼児音楽教育の上級資格を設け、推進した。幼児音楽教育の分野の指導者として、全カナダの教師、保育者、両親多くのワークショップとセミナーを行ってきた。また、アメリカ、オーストラリア、ハンガリー、フィンランドで開かれた ISME の幼児部会セミナーや世界大会において論文を発表した。

本書は「第1部 子ども The Child」「第2部 音楽 The Music」「第3部 教師 The Teacher」の3つの柱から成り、全214ページのほぼ4分の3が第2部にあてられている。子ども、音楽、教師という構成とその順序が説得的である。第1部では、0～2歳、2～3歳、3～4歳、4～5歳、5～6歳の5つの段階に分けて、「子どもの発達的一般的特徴」と「音楽的発達」がそれぞれ記述されている。前者は「学習、社会的発達、言語、想像力」、後者は「動き、歌唱、楽器の演奏、聴取」という観点から記述されている。「音楽は太陽のようなものである。その光線はすべての発達に関与している」という‘太陽の図’（尾見1996a：129に訳出）は、音楽教育による人間教育という、ドナ・ウッド女史の音楽教育論を表すものである。

第2部は、幼児期の音楽教育の目標、およびカリキュラムと教授法である。冒頭で幼児期の音楽教育の目標がこう述べられる。

われわれの第一の、そして主たる目標は、すべての幼児が音楽を楽しみ、音楽で幸せになるよう鼓舞することです。そこで、われわれは幼児の感情や理解のレベルに合った多様な音楽経験を提供しなければなりません。音楽という言葉は、人生のごく初期に開始することによって、最も良く学ばれるのです。

カリキュラムの原理は、「想像的で進歩的なプログラムによって、幼児の音やリズムに対する自然な興味を刺激する」「子どもたちが無意識のうちに音楽のあらゆる要素に気づくような楽しい遊び games を差し出すことによって、偉大な音楽の世界を用意しようとする」「身体活動と知的活動との釣り合い」「周到に計画された私たちのカリキュラム」「私たちの計画は子どもたちの発達段階に適切でなければならない」という記述が示すとおりである。カリキュラムは、第1部の幼児の「音楽的発達」の記述における、5つの年齢段階を‘縦糸’に、幼児の音楽経験のカテゴリーである「動き、歌唱、楽器の演奏、聴取」を‘横糸’に、系統的、体系的に提示される。各セクションは理念や教授原理の記述から始まり、古今の音楽教育家の名言が添え

られる。教材例も豊富だが、それに増して教授法の原則とその具体例が非常に説得的である。本稿では、教材例は教授法の説明に必要な最低限の量にとどめ、文化の違いを越えた普遍的理念や原理の、できるだけ忠実な翻訳につとめた。教材例を日本の文化に即したものに‘入れ換える’ことをせず、そのまま紹介し、直訳にとどめたのは、真のアダプテーションのためにはまずそれが必要な作業であると考えたからである。

日本の先行実践（コダーイ芸術教育研究所 1985/1994 他、永田栄一 1981、フォライ 1991、等）に学びつつ、総合的、体系的、系統的なドナ・ウッドの音楽教育の真のアダプテーションは次の課題である。

第3部は「教師が鍵です」という項目から始まる。教師のありかたについての示唆に富む重要な提案が記述されている。

Ⅱ. ドナ・ウッド『動く、歌う、聴く、楽器』における幼児の音楽教育の理論と実践

以下では、本書の「第二部 音楽 The Music」を要約して訳出する。本書のタイトルは、「動く」「歌う」「聴く」「楽器を演奏する」という、子どもの音楽指導における4つの活動領域をそのまま順に示したものである。本書全体のほぼ4分の3の分量を占める「第二部」は、4つのそれぞれの領域における幼児の音楽指導の原理と実際が、豊富な教材と指導例とともに詳細に記述されている。「第二部」の構成は以下のとおりである（ナンバリングは訳者による）。

1. 幼児期の音楽教育の目標 Goals of music education in early childhood
2. 動きと音楽 Movement and music
3. 歌うことを学ぶ Learning to sing
4. 音と聴取の遊び Sound and listening games
5. 楽器の特別な魅力 The special appeal of instruments

第2節から第5節の各節はそれぞれ、動き、歌唱、聴取、楽器が幼児の音楽教育にとってどのような意義を持つのかについて、その全体像が記述される。次いで各領域における指導の内容と方法が、順序立てて、譜例や図解入りで具体的に記述される。原書には一貫したナンバリングがないが、本書の構成を明確にするために、以下では訳者が整理して示した。

1. 幼児期の音楽教育の目標

われわれの第一の、そして主たる目標は、すべての幼児が音楽を楽しみ、音楽で幸せになる

よう鼓舞することです。そこで、われわれは幼児の感情や理解のレベルに合った多様な音楽経験を提供しなければなりません。音楽という言葉は、人生のごく初期に開始することによって、最も良く学ばれるのです。

1. 準備されたカリキュラム

私たちは、想像的で進歩的なプログラムによって、幼児の音やリズムに対する自然な興味を刺激するように心掛けなければなりません。音楽の学問的な側面に導くずっと前に、私たちは子どもたちに無意識のうちに音楽のあらゆる要素に気づくような楽しい遊び games を差し出すことによって、偉大な音楽の世界を用意しようとしています。音高どおりに歌え、知的に聴けるというような、身体活動と知的活動との釣り合いは、どんな楽器を使った音楽作りにおいてもその前提条件ですから、このような技能は、周到に計画された私たちのカリキュラムの中に含まれています。私たちの計画は子どもたちの発達段階に適切でなければなりません。

2. すべての子ども

私たちはどの子どもも受け入れ、尊重し、子どもたちのひとりひとりの違いに気づいていなければなりません。私たちはどの子どももできるだけ伸ばそうとします。「才能がある talented」という言葉に私たちは大変注意を払います。「才能がある」「才能がない」とレッテルを貼るのは早すぎます。音楽はすべての子どもたちのものなのです。

3. 音楽的趣味

音楽的趣味を発達させようとするならば、私たちは質の高いものを使わなければなりません。幼児は周囲のあらゆるものにとらわれない目で見て、受け入れるのですが、良いもの、並みのもの、悪いものを選ぶほどには成熟していません。文学的な刺激がマンガの本だけであるような子どもは、良い文学的な趣味を伸ばさないでしょう。けばけばしいおもちゃは一時的で表面的な楽しさを与えますが、砂、水、ブロックのように創造的な遊びのための質や可能性をもっていません。ですから教師は音楽的素材を選ぶときに、「子どもは聞いたものを好きになる」ということを心に留めておくべきです。

4. 聴取

聴取は音楽学習において重要な要素です。今日の世界に生きる子どもたちはここでは特別な援助を必要とします。私たちの音環境は、交通、機械、絶えまないラジオやテレビ、BGMといった不愉快な音でいっぱいになりつつあります。大変幼い子どもたちは「耳を閉じ」音を「消す」ことを身につけます。音楽の教師は「耳を開き」、子どもたちに音楽を「聴く」ことを教えなければなりません。

5. 動く、歌う、聴く、楽器を演奏する

ですからこのような基礎的な目標のために、私たちは、動く、歌う、聴く、楽器を演奏するという4つの特別な活動領域においてこのようにしてはという提案をします。多くの活動はいろいろな領域を含んでいますが、子どもはたいてい一時に一つのことを考えるので、この4つの特別な活動領域の中で組み立てる方が良いと思います。まず、一つの領域で始め、子どもたちの準備が整ったら別の活動を加えていきます。

2. 動きと音楽 Movement and music

2-1. 動き：その音楽教育的意義

「動きは子どもの成長にとって自然でかつ必要です。」(Doll and Nelson)

[1] 動き

幼児教育の教師も研究者も動きの教育 movement education の重要性について気づいています。なぜなら動きの教育は子どもの成長と発達に重要な貢献をするからです。それは次のようなことです。

1. 身体的・感情的な安寧
2. 身体的イメージと自己の感覚
3. 次のことに関係する概念：大きさ「一番大きいブロックから飛び下りてみよう」；形「円になって歩きましょう」；距離「大きい歩幅で歩きましょう」；面積「クルクル回するための広いスペースをとりましょう」；関係「ピアノから向こうへスキップしていき、ゆっくり歩いて戻っていらっしゃい」；体積「カボチャの種がだんだん大きくなってハロウィーンの大きなかぼちゃになりますよ」；バランス「円のまん中に立ちましょう」
4. 動きの遊びは緊張を中和します。
5. 引っ込み思案で不安定な子どもに自信を与えます。
6. 子どもが人や者の中で安全に動けるような身体各部分の調整をしたり気づいたりすることを発達させます。
7. 社会的な経験を刺激し、グループで動く喜び、リーダーやリーダーに従う人になったりする喜びを味わわせます。

「子どもの意識的、無意識的な動きは多くのことを教えてくれます。子どもはまだ言葉では言えない多くのことを理解しています。子どもは理解したことをジェスチャーや他の動きによって表すことができます。注意深く観察すると子どもの思考を洞察することができます。」

ます。動きは学習の非言語的な手段となるのです。学習をある程度まで評価することただちに可能になります。」(Barbara Andress)

[2] 音楽教育と動き

「音楽と動きは別のものであるが、初めの段階では両者はたやすくいっしょに教えられる。」(Gray and Percival)

動きの教育が音楽教育と結びつけられるとき、両者は互いに助け合います。子どもにとって概念は高次なものとなり、明確になるのです。「速く走りましょう、それからゆっくり歩きましょう」という活動では、2つの対照的な動きとテンポを感じることを学びます。このとき速い音とゆっくりとした音で動きが伴奏されるなら、子どもは2つの音楽のテンポを感じ、聞き、わかることを学んでいます。音楽のすべての要素、すなわち拍、拍子、長さ、リズムパターン、アクセント、音強変化、旋律、形式に対する感覚は、このような音楽と動きの活動を通して感じ取られ、理解されるのです。

オルフ・シュールヴェルクでは、音楽のリズムの要素は大いに強調され、動きの教育は重要な部分となっています。初期の段階のすべてのレッスンでは、聴取とすばやい反応の技能を刺激するために、歩く、走る、飛ぶ、ギャロップ、スキップといった幼児の自然な動きを活用します。単純で明解であることによって、どの子どもも動きの遊びを理解し参加することができます。

「基本的な音楽は決して音楽単独ではなく、動き、舞踊、言葉とともに統一体を形成している。」(Carl Orff)

2-2. 音楽と動きの遊び music and movement games : その内容と方法

[1] 動きの遊びを発展的に計画する

①歩く・止まる：「私が歩いたら歩いてね、私が止まったら止まってね。私をよく見て。」

教師も子どもたちも一緒に同じ方向に歩きます(時計の反対回りが良い)。子どもはグループで一緒に動くことに注意を払います。正確にできることよりも活動に参加することが重要です。部屋いっぱいに広がって歩き、部屋の大きさや形、床の感触に慣れます。

②音に従って：「私が楽器を鳴らしたら歩いてね、鳴りやんだら止まってね。よく聴いて。」

ハンドドラムで8小節の伴奏を数回繰り返します。子どもは無意識にフレーズの長さを感じとります。まず自然なテンポで始め、伴奏をウッドブロックやピアノに変えたり、違うテンポにしたり、だんだん速くしたり遅くしたりします。人につかからないように、いろいろな方向に歩いたり、向きを変えたりします。身体のコントロールが要求されます。

③空間の遊び：自分の場所を見つけて立ち、ぐると両腕を伸ばして自分の場所を感じて、

その場で跳んでみたり，床に座ってみたりします。こうして‘場所’の重要さを学ぶことで，‘自分自身の’場所で独立して自由に動けるのです。しゃがんで動き回る，空中をキックする，床をたたく，前，後ろ，横へ前進を揺さぶる，など。これで体を意識する創造的な遊びに進む準備ができたので，続いて足，腕，手，指，肩，頭などの動きのいろいろな可能性をためします。

④動物の歩行：「犬，猫，熊，ネズミになって歩きましょう。」

実際に見たことのある動物やまだ見たことのない動物になってみます。子どもたちが動物の動きに効果音を付けます。

⑤乗り物：乗用車，バス，オートバイ，消防車，大きなトラックになり，適当な効果音を付けます。

※③～⑤の伴奏について：まず伴奏なしで，それから動きの質（テンポや音量）に考慮して，声や打楽器やピアノの伴奏を加えます。8～16小節の長さで始めます。

⑥音楽への全身反応を発達させるよう助けること。

[2] 子供にとって基本的で自然な動きの方法

- ①歩く ②ギャロップ ③走る ④ジャンプの遊び ⑤片足跳びの遊び ⑥スキップの遊び
⑦リズムの組み合わせ

[3] 即興と創造性

幼児教育において美術，音楽，演劇の創造的活動はカリキュラムの他の部分と同様に重要なものです。子どもたち自身の考え，感情，思考を表現できる活動と素材を選ぶ多くの機会を，私たちは幼児に与えるべきです。これらの機会を，動き，言葉，歌，打楽器を通した音楽活動の中で，子どもたちが手に入れられるべきなのです。日常生活で自由がない分だけ，即興と創造性は，子どもが人間として発達するために二重に重要です。音楽のすべての授業において，提案したり，考えを発展させたり，問題を解決したり，別のやり方をクラスに示す機会をどの子どもももつべきです。即興の初歩において子どもたちは，自己の表現の喜びを経験したり，創造者としての自信を発展させますが，動きはそのための自然な活動です。

[4] 構成された動きのある遊び歌 structured movement and singing games

遊びの動きが歌詞を伴っているということによって，動きのある遊び歌は幼児にふさわしいものとなるのです。遊びが何度も繰り返されるたびに，似た動作が伴います。反復は歌唱の技能の発達も助けます。グループの遊びは，独立した個人であってグループの一員であるということを知させます。

これらの歌遊びは歌詞が動きを教えるので，教師は言葉で説明する必要がほとんどありません。

ん。また、歌詞が遊びを進行させます。

どの教師も伝統的な指遊び、遊び歌、お楽しみ会の遊びやフォークダンスを含む構造化された動きのある遊び歌のレパートリーをもっているべきです。

伝統的な遊び歌は私たちの文化の一部であり、すべての子どもたちに成長の過程で手渡されるべきものです。幼児向けに遊びが改作されるものもありますが、伝統本来の質と精神を保つようにしたいものです。

◆構成された動きのある遊び structured games のための指導の系統（図1）

第1段階 1. 自分の空間を見つける (a) 2. 移動してまた自分の空間に戻る (b)

第2段階 1. 円になってすわる・立つ (c) 2. 円のまん中にオニがいる (d) 3. 一人または複数の子どもが円になった子どもたちの後ろや前、または子どもたちの間を動く (e)

第3段階 1. 二人組 (f) 2. 手をつないで円になって歩く (g) 3. 手をつながないで円になって歩く (h) 4. リーダーの後を列になって動く (i)

6-8歳のための第4段階 1. 二重の円 (j) 2. 二人組で円になって歩く (k) 3. パートナーは向かい合って二列になり、一組が二列の間を行き来する (l)

[5] 動きと音楽を伴った役割遊び [略]

[6] リラックスのためのゲームと子守歌 [略]

[7] 音楽の諸要素を教えるための動きのゲーム——5～6歳児のために——

等拍、遅い拍、拍子、アウフタクト、リズム・パターン、フレーズ、強い・弱い、高い・中程の・低い、上行する・下行する、アクセント、形式 (ABA, 動きのロンド、動きのカノン)

[8] 動きのドラマの実践例 (4-6歳児) [略]

[9] 音楽と動きの授業——実践のための十箇条の提案

①8～16人のグループで。②グループ内の月齢差はできれば6～8か月に。③縦横、6メートルと9メートルで、明るく換気の良い部屋。④床は清潔でなめらかで滑らないこと。⑤子どもたちは動きやすい服装で素足が良い。⑥子どもの世話をする、気のつく補助者がいるとレッスンが円滑に進む。⑦‘自由な遊び’における子どもの自然な動きを観察する。⑧子どもが進歩し、興味を持ち続ける音楽と動きの授業は、教師の周到な計画が要求される‘教師主導’の活動です。カリキュラムの計画とレッスンの論理的な系統が不可欠です。⑨教師は最初からグループ全体を把握し、事故がないように注意しなければなりません。⑩子どもが動きや聴取の技能を学ぶのには時間と経験が要ります。また、教師が音楽や動きの指導を学ぶのにも、時間と経験とたゆまぬ研鑽が要ります。動きは今日の音楽教育において、とりわけ幼児には重要な要素です。

[10] 気のすすまない子ども [略]

[11] 子どもの動きを鼓舞する物たち

フェルトのリボン，楽器，四角いスカーフ，絵や絵本 [略]

3. 歌うことを学ぶ Learning to sing

3-1. 歌唱：その音楽教育的意義

すべての子どもが歌うことを学べます。呼吸することができれば、あなたは歌えます。

たくさん歌えば歌うほど、上手に歌えます。

歌唱能力は将来のどの音楽教育にとっても、しっかりとした基礎なのです。よい手本を模倣したりしばしば繰り返される歌を聴くことで、子どもは歌うことを学びます。生まれたときから歌を聴いて育った子どもは、歌うことをたやすく学びます。歌唱は乳児の喃語や唱え言葉から始まります。やがて子どもは、歌の中の言葉のいくつかを何らかの旋律を付けて歌い始めます。それから、大人の歌う後について歌い、ついには歌を始めから終わりまで通して、正しい音程で、グループでも一人でも歌うようになります。

歌う声をさがせない子どもたちを援助しましょう。その子どもたちは今までに歌ったことがないのです。歌のほんの一部を使って、エコーで（教師が歌いかけ、子どもは同じように歌い返す方法で）個別に対応します。子どもが今歌っている高さとは違う高さでやってみて、音が合うとどのように鳴り、どんな感じがするのかということを示します。少しでも進歩があればほめて励まします。グループで歌うことは子どもたちを支え、助けます。遊びの中で何度も繰り返される歌遊び singing game は、声を発達させる自然な方法です。開始音を木琴やピアノで鳴らしましょう。これで教師は歌を前奏や伴奏なしで始められます。これは子どもが歌の開始音を即座につかむ練習になります。教師が“歌を開始する言葉”を歌の開始音で唱えることもできます。「雨よ、あっちへ行け」という小さな動きを拍の頭に入れることによって、子どもたちは歌うことを励まされます。[楽譜1]

3-2. 話し言葉，唱え言葉，歌遊びにおける音楽的経験：その内容と方法

[1] 言葉遊び speech play games

指遊び，韻律のある唱え言葉 nursery rhyme，言葉遊び speech game を楽しんだ子どもは音楽的経験を受け取っています。これらの遊びにおいて子どもは、規則正しい拍，テンポ，リズム・パターン，強弱，音高，音色，フレーズを無意識に聴き、感じています。これらの唱え言葉や指遊びはリズムカルでなくおこなわれるかもしれません。しかし、もし音楽的学習が目標

であれば、両親や教師は唱え言葉を唱えるとき、音楽的要素を強調しようとするでしょう。唱え言葉の中で拍 pulse や拍節 beat の位置を、単語の上に短い縦の線を付して示しました。言葉遊び speech game は子どもたちにとって、歌われる唱え言葉 singing chant, 遊び歌 singing games への準備となります。

- ①言葉遊び speech game：幼児や乳児の段階で両親と子どもによって遊ばれます。しかしもっと年長の子どもによっても遊ばれます。子どもと良いアイ・コンタクトを保つようにしましょう。

[例1] “Walk Down the Path (細道を歩いて行って：顔遊び)”：フレーズの感覚に気づきます。[例2] “Round About and Round About (トットコ トットコ おにわをまわれ)”：音高の変化とフレーズの感覚に気づきます。[例3] “To Market, To Market (市場へ買い物)” [楽譜2]：子どもをひざや足に乗せて揺るのに良い遊びです。[例4] “This Little Pig Went To Market”：フレーズ、アクセント、音高、テンポに気づきます。

②拍 beat を感じる遊び：拍を「つかみ」、拍をキープすることは音楽演奏の基本です。私たちは幼児期に拍の正確さを期待しませんが、指遊びや韻律のある言葉は子どもたちに無意識の内に拍を「つかみ」、拍をキープすることを教えます。子どもに自然で心地よいテンポを示しましょう。基本拍と分割された拍、8分の6拍子、足踏みで拍をとりながら手拍子で言葉のリズムをとることを学びます。[例] “Open them, shut them” “Ride A Cock Horse” “Andy

Pandy Sugary Candy” “Hickory Dickory Dock” “The Grand Old Duke of York”

③テンポを感じる遊び：[例1] “The Slow Train / The Fast Train”：テンポがだんだん遅くなる、だんだん速くなることを楽しみます。[例2] “Eeny meeny (オニ決め歌)” [楽譜3]：いろいろなテンポで楽しみます。

④数え唱え歌 counting rhymes：等拍で前進する感じ on-going beat を楽しみます。[例] “Eeny meeny” ほか。

⑤リズム・パターンを感じる遊び：1. リズム・パターンを示す前に、等拍の感じを体験させます。2. 子どもが興味を持つ単語や短文を使います。3. 言葉に、軽くたたいたり手拍子を打つなどの動きを付けます。4. 普通の声と速さで始めて、慣れてきたらテンポや強さや音色を変えます。5. はっきりと言い、リズムを少し強調しますが、話し言葉として自然なリズムを保ちます。6. 名前や単語を4回繰り返すなどして、フレーズの長さの感覚をつかませます。[例1] 韻律のある言葉におけるリズム [楽譜4]，[例2] 名前や単語におけるリズム [楽譜5]，[例3] 動物の名前のリズム [楽譜6]，十分に慣れたら、リズム譜を導入します。[楽譜7] 手拍子をしながら、リズム唱（ターター，ティティティ）をします。

⑥休止を感じる Feeling the rest：休止は計測された measured silence 沈黙です。休止はリズムの重要な要素なので、注意深く示されなければなりません。休止のところで言葉

(Right; Hold; Yes) を言ったり, 音 (声で sss という音) を出したり, 小さな動き (「熱いお粥」の歌で, 息を吹いてさます音と動き) を入れたりすることで, 休止を感じることができます。

- ⑦エコーの遊び: リズム・パターンを聴いて手拍子で模倣します。リズム・パターンに用いる言葉は, 幼児には意味のある話し言葉の方が良いのです。[楽譜 8]

- ⑧問いと答えの遊び: [例 1] “Pussycat, Pussycat, where have been?” [伝承わらべうた] :
このような問いと答えのモチーフでできた唱え歌で始めるとよいでしょう。[例 2] 1 対
全員の問答遊び「誕生日はいつですか」 (“Ap-ples, pea-ches, pears and plums,/Tell us
when your birth-day comes.--Ja-nu-a-ry six-teenth.”) [例 3] 輪になってまん中のオニと周
囲の子どもたちとの問答遊び [楽譜 9]

話し言葉 speech は子どもにとって重要です。初期のリズム遊びは話し言葉を含むべきです。その後、リズム・パターンを手拍子したり楽器で打ったりしているときに、言葉を‘心の中で’‘考える’ことによって、「内的聴取」inner hearing を発達させることができるでしょう。

[2] 歌われる唱え言葉 singing chant

言葉や旋律の断片を使って言葉を唱えたり、即興したりすることは、乳児の喃語から発達していきます。遊ばせ歌を歌って子どもを遊ばせる両親は、子どもを励まし音楽的反応を促しているのです。

このような子どもたちはたいいてい、歌うことを容易に、そして喜びをもって学びます。‘生きた’音楽（つまり、その子どもにとって親しい人がしてくれる音楽で、録音されたものや‘テレビ、ラジオ、ステージ’の芸人による音楽とは対極のもの）で音楽的に刺激を受けてこなかった子どもたちは、歌う声をさがせずにいるかも知れません。話す‘音’と歌う‘音’の出しかたの違いを知らないかもしれません。

- ①歌う声を見つける：3～5歳のグループで不安定な声、一本調子の声、話す声が聴こえたとき、この遊びをします。「歌う声はどこから出てきますか。あなたの歌う声は話す声と違っていませんか。」教師の唱える声・歌う声を子どもが模倣します。時間があれば、歌声が不安定な子どもには、それが問題であると感じさせることなく、一対一で行います。子どもの声域は中央のC・D（一点ハ音・二音）からG・A（一点ト音・イ音）までの5～6音です。多くの教師が子どもの声域より低い音域で歌い、他方、これまでの子どもの歌唱教材はしばしば高すぎました。それは調子はずれや歌にならない歌い方を育てているようなものです。幼児が心地よく歌える音域の歌を選びましょう。[楽譜10]
- ②音を一致させる遊び：[例1] 歌で出席をとる遊び。一人一人違う旋律のパターンで歌いかけます。[楽譜11] 年間を通じて何回か録音すると、一人一人の声域や聴取の発達を知ることができます。子どもは録音された自分の声を聴くのが好きです。歌えなかった子ど

もが突然歌う声を発見することがときどきあります。

③唱え言葉，即興，遊び場の唱え言葉：単語にリズムとふしをつけて歌います。1語から数語，1文へとしだいに長いフレーズを即興的に歌います。ナンセンスな言葉，動物や鳥の言葉で歌う会話は，耳を発達させ，即興を促します。

④子供の唱え言葉による歌と遊び：喜びと自信をもって歌うことを学ぶ重要な段階です。歌唱と聴取の能力の観点から見た「子どもが居るところ」から出発しようとするならば，子どもの話す言葉のリズムに従った，狭い音域の歌を選ばなければなりません。この段階をとばしたり，急いだりしてはいけません。ここに載せた唱え歌は，子どもたちが歌う声を見つけるのを助けます。

良い幼稚園や保育所は，おもちゃ，本，家具，屋外の遊具などの設備を細心の注意を払って選びます。このとき，子どもの発達段階，能力，技能，学習の目標，良い趣味が考慮されています。音楽を学習するときのおもちゃは歌であり，おもちゃの選定のときと同様の細心の注意を払って選ばれなければなりません。毎回のレッスンに必ず，正しい音高と適切な表現で歌うこと学ぶことを助ける歌がなくてはなりません。ここに収録したすべての歌はこの分類にかなったものです [表1]。

歌には階名が付されていますが，階名は教師にとって易しい読譜法です。でも，6～7歳までの子どもにはほとんど意味がありません（階名を教えるには早すぎます）。

伝統的な遊び歌は，子どもたちが何世代にもわたって，自分自身に歌を教えるために歌われてきました。どの子どもの声も伸ばすことができます。どの子どもも自分で歌えるようになるのです。

[遊び歌の例] “Clap clap clap your hands” 歌詞のとおり動作を付けて歌います。「手をたたこう，みんなでてをたたこう。ひざをたたこう，みんなでひざをたたこう。まばたきしよ

表1 10の遊び歌—タイトル・対象年齢・構成音

No.	遊 び 歌	対象年齢	構成音
1	Rain, rain, go away	2-5	ラ ソ ミ
2	See saw	3-5	ラ ソ ミ
3	Clap clap clap your hands	2-4	ラ ソ ミ
4	Starlight	3-5	ラ ソ ミ
5	Bye baby bunting	2-5	ソ ミ ラ
6	Jack be nimble	3-5	ラ ソ ミ
7	Bell horses	3-5	ソ ミ ラ
8	Engine, engine Number nine	3-4-5	ソ ミ ラ
9	Lucy locket	3-4	ラ ソ ミ
10	Charlie over the ocean	4-5	ソ ミ

う、みんなでまばたきしよう。」そして、拍を感じる、別の言葉と動作を即興的につくります。
「泳ごう」「歩こう」「ドラムをたたこう」など。[楽譜 12]

[3] 遊び歌 singing games

この節における遊び歌は、前節における3音から成る遊び歌に続くもので、発達段階の順に載せています [表2]。

歌う声が出せ、音高の感覚が解るようになると、このような発達を促す遊び歌を歌う中で、声域はだんだん広がっていきます。このタイプの最低1曲は、歌唱の技能を伸ばすために各レッスンに含まれているべきです。教師は音域がもっと広く、リズムがもっと複雑な全音階の歌

表2 29の遊び歌—タイトル・対象年齢・構成音

No.	遊 び 歌	対象年齢	構 成 音
1	Teddy bear, teddy bear	3-4-5	ソミレド
2	I see the moon	4-5	ソミド
3	Mary had a little lamb	3-4-5	ソミレド
4	Ring around a rozy	4-5	ラソミド
5	Hop old squirrel	3-4	ミレド
6	I've lost the closet key	4-5-6	ミレド
7	Here comes a blue bird	4-5	ラソミレド
8	Here sits a monkey	3-4-5	ラソファミレド
9	Fuzzy wuzzy	5-6	ソミド
10	The old gray cat	4-5	ミドシラソ
11	All the little ducklings	3-4	ラソファミレド
12	Punchinello	4-5-6	ラソファミレド
13	Skip one window	3-4-5	ラソファミレド
14	Let's take a walk	5-6	ラソファミレド
15	Down the road	4-7	ミレドラソ
16	All around the buttercup	5	ソミレド
17	Sally go 'round the sun	5	ラソミレド
18	Who's that knocking at the door	5	ソミレド
19	Hallowe'en is pumpkin time	3-4-5	ソファミレド
20	I love little pussy	4-5	ソファミレド
21	I sent a letter to my love	3-4-5	ファミレドシラソ
22	Down came a lady	5-6	ミドラソ
23	Here we go 'round the mountain a partner game	5-6	ソファミレド
24	Five little robins	3-4-5	ラソファミレド
25	The farmer's in the dell	4-5	ラソファミレド
26	Here we go looby loo	3-4-5	ラソファミレド
27	The big ship sails down the Allee-Allee-O	5-6	ミレドシラソ
28	Tommy thumb	3-4-5	ラソファミレド
29	See the ponies galloping	2-3-4-5	ソファミレド

を、子どもたちに歌って聴かせることができますし、実際そうすべきです。音域が広い歌は、動きの遊びにおける動作を伴っていることがあり、それらの歌は教師が歌い、子どもが聴いたり動いたりする聴取の経験としても用いられるでしょう。

どの歌も自然に、はっきりと、そして正しい音程で歌いましょう。歌う喜びを知っている教師は、その喜びを子どもたちに伝えることができます。

4. 音と聴取の遊び Sound and listening games

4-1. 聴取と創作：その音楽教育的意義

幼い子どもたちは、秩序だった音楽的な音に対するのと同じように、身の回りのランダムな音に対しても興味をもっています。すべての教師は、消防車が通った時、窓が風で鳴ったとき、水道管を水がドクドク流れる音がしたとき、時にはレッスン・プランからはずれてみる必要があります。

子どもは遊んでいるとき、口や、声、舌、手、足を使って出す音をいろいろ試しているのです。子どもたちは身の回りにある音を模倣したり、学んだりしています。もし、両親や教師がここに可能性があることに気づいているならば、こうたずねるでしょう。

「あの音はどこから聞こえてくるのでしょうか。」

「あの音は何が出している音でしょうか。」

「あの音はどうやって出る音でしょうか。金属の音、それとも木の音でしょうか。」

音を聴取したり、実験したりすることは音楽的学習に導くのです。

多すぎる音は騒音であり望ましくない音です。適切に使われていなければ音楽でさえ騒音です。現代の子どもたちは騒音の世界に住んでいます。自分を守るために耳を閉じることを学んでしまっています。子どもたちは音楽の音に耳を開くための特別な聴取の遊びを必要としています。

音楽を教える前に、子どもたちに聴くことを教えなければなりません。正常な耳の子どもたちは聞こえます。しかし、聴けるのでしょうか。聴取とは聞こえたことを心的に理解しようとすることです。

しかし、聴取のゲームで遊ぶ前に、教師はクラスの音環境を聴かねばなりません。聴取と学習は関係しあうのでしょうか。BGMとしてのラジオ、レコード、絶えず流れる有線放送の音楽は騒音公害の一形式です。それは子どもたちに‘耳をふさぐ’ように教えます。

4-2. 音の音楽的経験と聴取の遊び：その内容と方法

[1] 音 sound と聴取の遊び listening games

- ①耳を開く Open your ears : 1. 目を閉じて、1分間、じっと身の回りの音を聴きます。「何が聴こえましたか。」子どもは足音、風の音、消防自動車の音などを答えます。2. 目を閉じて、手拍子や指鳴らしなど教師が出す音を聴いて答えます。3. ‘音のおもちゃ箱’で音を探索して遊びます。‘音のおもちゃ箱’は丈夫な箱の中に、例えば小さなベル、1対のサンドペーパーのブロック、木製スプーン2本、金属製スプーン2本、中身がいろいろ違うシェーカーなど、いろいろな音具を入れて作ります。
- ②音と沈黙 sound and silence : 1. 楽器（ドラム、ピアノ、クラベスなど）が鳴っている間は歩き、楽器が鳴りやんだら、止まります。数回繰り返すと、ぴたりと止まれるようになります。2. ドラムが鳴っている間は走り、鳴りやんだら、「銅像になったり」「凍りついたり」します。毎回違う「銅像」になって止まります。ドラムは同じ長さのフレーズを数回繰り返し、それからフレーズを長くしたり短くしたりします。
- ③音——音の固有な特徴 Timbre-specific characteristics of sound : 1. 4つの打楽器（マラカス、トライアングル、木製スティック、皮の太鼓）の音色を比べます。楽器の素材や、名前をたずねます。スクリーンの後ろで鳴らして、音色だけで楽器の名前を当てます。2. ヴァイオリン、ピアノ、リコーダー、木琴、鉄琴などの旋律楽器の音色を聴き比べます。

[2] 音を作る；音と動き Making sound; sound and movement

音を作る——異なる音を作る——自分の作った音を聴く

- ①舌、歯、唇、頬でどんな音楽が作れるでしょうか。②手を打つことで別の音を作りましょう。手のひらをくぼませて、平らにして、1本・2本・3本・4本の指で。③体の別の部分を使ってどんな音を作れるでしょうか。足踏みして、脚を打って、手を打って、指を鳴らして…。④声でどんな音を作れるでしょうか。話す声、歌う声、ささやく声、ハミングする声で。⑤絵と音。絵からどんな音が聴こえてきますか。動物や鳥たちが、都会で、農場で、ジャングルで、動物園で。機械のなかま、たとえば時計、掃除機、ミキサー。乗り物のなかま、たとえば車、トラック、飛行機、馬、オートバイ。大きく鮮明に図示された絵本は、子どもたちに興味を与え、これらの‘音活動’に構造を与えます。⑥自然の音。「風に、雨に、太陽にどんな音を聴きますか。」そして、自然、乗り物、機械、動物の音は、動きと組み合わせたとき、子どもにはとりわけ楽しいものです。ピアノや打楽器による適切な伴奏は、始まりと終りをコントロールします。「風は、雨は、太陽は何をしますか。」

[3] 音楽の要素を教えるための聴取の遊び listening games

①大きい・小さい（音量）：大きい声や小さい声で言葉を言ったり、歌ったりします。行進の歌を大きい声で歌った後、子守歌を柔らかい声で歌います。②速い・遅い（テンポ）：[略]
③高い・低い（音高）：[略] ④音階の歌：[略] ⑤移調する：音域の狭く良く知っている歌を、2回目に移調した調で歌います。反復の多い歌や、歌詞が何番もある歌だと音楽的な効果があります。子どもはすぐ新しい調に追い付いて歌います。教師は音高の感覚と内聴ができなければなりません。⑥エコー（山びこ）で歌う遊び：音楽的に言えば「音を合わせること tone matching」です。2音または3音で（ソーミ、次いでラ）始め、5～6音に増やしていきます。半音のない5音音階を使います。下行する旋律が易しく、下行する短3度が子どもにとって自然な音程です。空間で手を上下させることで音高 pitch を示します。[楽譜 13]

⑦問いと答えの遊び：[例] 子どもたちは輪になって座り、目を閉じ、手を後ろにします。教師が円の後ろを回ってコイン、指輪、鍵をだれかの手の中にそっと入れます。目を開けて、歌で問答します。[楽譜 14] ⑧音楽的記憶の遊び：歌の言葉（歌詞）は子どもにとって大変重要です。ですから幼児期における音楽学習の多くが歌うことをとおして行われるのです。歌詞は子どもが旋律やリズム・パターンを記憶するのを助けます。しかし、音楽的な聴覚を発達させ、

後の器楽学習（言葉のない音楽）の準備をするのなら、言葉に拠らない音楽的記憶の遊びを導入しなければなりません。1. 子どもが良く知っていて、リズム・パターンがはっきりした旋律や歌を、教師がハミングやラララで歌います。始めやまん中、終わりの、一部のフレーズだけを示したりします。2. 子どももハミングやラララで歌います。3. 歌の内容を描いた絵を指さすことで、何の歌か答えます。4. 歌詞でないシラブルで歌うことで子どもは、エコー（同型の反復）がある、同じ音の反復がある、旋律が上行したり下行したりする、といった旋律線の形によりいっそう気づくでしょう。⑨即興で歌う：歌で会話します。教師が歌でたずね、子どもが歌で答えます。[楽譜 15] ⑩即興で歌詞を作る：[略] ⑪活動例：[例] 4－6 歳のための「飛行機遊び」[略] [例] 4～6 歳のための消防士遊び [略]

5. 楽器の特別な魅力 The special appeal of instruments

5-1. 楽器：その音楽教育的意義

ドラムを打ったり鈴を鳴らすことは幼児が興味をもって音楽を作る方法です。子供たちの中には、音楽にすぐ反応して動くということをしない子どももいれば、歌う声が探せない子どももいます。そのような子どもも、シンプルな楽器で楽しく参加するかもしれません。ですから教師は最初の段階で、音楽を経験する他の方法をやってみよう誘ってみましょう。

5-2. 打楽器で音楽を作る：その内容と方法

[1] 最初の経験：自由な探索 free experimentation

①最初の経験を注意深く計画しましょう。②安全で、良い音のする楽器をバスケットに入れて、子どもたちを音楽の世界に導きましょう。③2つの音を選び、探索したり、実験したりします（鈴とシェーカー）。④最初の楽器は握りやすく、鳴らしやすいものでなければなりません。⑤どの子どもにも楽器がいきわたるようにします。⑥楽器は見た目に魅力的であって、全員で鳴らしても音響が良いように、楽器の種類と配分を考えます。⑦子どもは楽器を選び、鳴らしてみ、音の質を発見します。別の楽器もためします。⑧それぞれが数分間鳴らした後、良く知っている歌を全員で、楽器を鳴らしながら歌います。歌の言葉は子どもが拍や拍子、歌

の始まりと終わりを感ずることを助けます。⑨行進やパレードのように、楽器を鳴らしながら歌って歩きます。教師がドラム、ギター、リコーダー、ピアノなどで加われば、テンポや、始めと終わりを示すことができるでしょう。⑩最初の指導は短時間で幸福なものであるべきです。子どもたちの間を歩いてバスケットに楽器を集めて回ります。

[2] 最初の楽器：基本的な打楽器——基本的な技能と音楽的な使い方

1回のレッスンに導入するのは1つの音 one sound で、全員が同じ楽器を体験します。その楽器の音は子どもにいつそう意味を持つでしょう。楽器の扱い方を習得したら、その楽器で‘音楽作り’をします。その後、楽器を加えていきますが、4つの‘音’——つまり金属のもの（鈴）、振るもの（マラカス）、木のもの（リズム・スティック）皮のもの（ドラム）で十分です。楽器は人数分揃えて、それぞれの‘音’をそれぞれの箱に保管します。

4つの‘音’の基本的な技能と音楽的な使い方：①鈴 ②マラカス、シェーカー ③ドラム、トムトム ④リズムスティック ⑤ハンドドラム [略]

[3] 異なる音の遊び：音の組み合わせ

4つの‘音’の楽器を経験した後に、2つから4つの異なる‘音’を使った遊びをします。
[遊びの例] ①高い音と低い音、そしてその間の音：子どもは鈴かドラムを選んで手にします。
(a)「私が高いところ（音域）で“Baa Baa Black Sheep”を（ピアノで）弾いたら、鈴が鳴らします。ドラムはお休みです。低いところ弾いたら、ドラムが鳴らします。鈴はお休みです。」
(b) これに動きを加えます。歩きながら楽器を鳴らし、お休みのときは止まります。(c) 年長の子どもたちは中音域も区別できるので、リズム・スティックやマラカスで加えます。②話し言葉（動物や植物の名前など）のリズムを使って、言葉を唱えながらドラムやリズム・スティックでリズムのエコー（模倣）をします。③ [楽譜 16] 歌を7回繰り返して歌い、3～4、7～8小節の「ラララ」で楽器を入れます。2～5回目は4つの異なる‘音’の楽器を1種類ずつ、6回目は全部の楽器を、7回目は全員で行進しながら全部の楽器を入れます。

[4] ソロの楽器

ソロの楽器（同種類を複数同時に鳴らすのではなく、1つだけで演奏する楽器）には、ティンパニ、ボンゴ、トライアングル、ウッドブロック、タンブリン、シンバル、一対のサンド・ブロックがあります。固有の音高と音色を持つ楽器なので、こうした音の特質を知るためには、子どもたちは一人一人、ソロで経験した方が良いでしょう。

楽器の奏法と教材例、効果音としての使い方の例：[略]

[5] 旋律楽器：調律された楽器

①チャイム・バー（1音ずつの鉄琴）：この楽器は幼児の打楽器の経験に新しい次元を開く

ものです。基本的な打楽器や聴取の遊びを経験し、4～5歳になると、自分たちの歌を伴奏するための単純なボルドゥーンや短い旋律のパターンを演奏するレディネスができています。この楽器は基本的な打楽器より身体的な制御が必要なので、音楽的な訓練 musical discipline のためのレディネスが整っていなければなりません。その他に歌唱の技能も必要です。チャイム・バーは絶対音高 (C, D, E ……) のための良い導入になります。

良い音を鳴らすための技能の練習はこのようにしています。ペントニック（半音のない5音の）音階の音を全員で鳴らします（例えば12人のクラスでは、低いC音，G音，高いC音をそれぞれ3人ずつ，D音，E音，A音を一人ずつという配分にします）。ゆっくりと柔らかく，弾むように音板の中央を打ちます。手首と腕を使って，短いスタッカートのように音板から離れます。子どもたちに良い音を選んで打つようにさせます。ペントニック音階のすべての音を同時に鳴らす‘クラスター’効果は，ゆっくりと柔らかく演奏されると‘音楽的’です。この‘クラスター’（CDEGACの和音）で，Cペントニックの歌を伴奏できます。[楽譜17] 拍の頭に‘クラスター’の和音を鳴らします。2小節の“歌を開始する言葉”を教師が楽器とともに歌って前奏にします。これを（A）として，詩（B）をはさんで，再び（A）を繰り返すことで，ABAという形式の作品になります。

②アルトの木琴と鉄琴：[略]

[6] 楽器を購入する：[略]

[7] 教師や親が作る楽器：[略]

おわりに

「教師が鍵です」——第3部の冒頭の項目である。目標やカリキュラムがどんなにすばらしく書かれていても、教師にそれを理解し、実践する力がなければ意味がない。教材論から、教師論へ——まさにそのとおりである。

ドナ・ウッドは、ISMEの幼児教育専門部会を創設、推進してきた音楽教育研究者・実践家たちの一人である。同部会に貢献のあるハンガリーのフォライ、アメリカのアロノフ、アンドレス、シムスは互いに影響を与え合いながら、それぞれが個性的、創造的に「すべての幼児のための質の高い音楽経験」を提供する音楽教育を展開してきた。ドナ・ウッドはダルクローズのリトミックに学ぶところが大きかったと聞いたが、コダーイやオルフにも通暁している。このことは、カリキュラムや教授法は決して一通りではないことや、音楽教育は（往々にして外国の）特定の方法に頼るのではなく、つねに教師の音楽性と創造性に拠らなければならないことを教えてくれる。

参考文献

アロノフ, フランセス, 畑玲子 (訳)

1990 『幼児と音楽』音楽之友社.

尾見敦子

1985 「子どもが歌う」大宮真琴; 徳丸吉彦 (編) 『幼児と音楽』, pp. 65-116, 有斐閣.

1996 a 「世界の幼児音楽教育の動向—ISME 世界大会と幼児部会セミナー 1992/1994 をとおして—」
『川村学園女子大学研究紀要』第 7 巻第 2 号, pp. 111-132.

1996 b 「保育歌唱教材の様式的研究 (2) —生活や行事の歌を中心に—」『日本保育学会第 49 回大会論文
文集』, pp. 96-97.

1997 a 「音色」「楽器」「打楽器」「リズム楽器」岡田正章; 千羽喜代子他 (編) 『現代保育用語辞典』,
pp. 55-56; p. 73; pp. 282-283; p. 455, フレーベル館.

1997 b 「歌を伴う伝承遊びの世代間継承の試み—保育者養成の授業実践から—」『日本保育学会第 50
回大会論文集』, pp. 206-207.

尾見敦子; 伊吹山真帆子

1985 「リズムから考える」大宮真琴; 徳丸吉彦 (編) 『幼児と音楽』, pp. 117-169, 有斐閣.

1995 「保育歌唱教材の様式的研究 (1) —教材集の定型とその日本の特質について」『日本保育学会第
48 回大会論文集』, pp. 514-515.

コダーイ芸術教育研究所

1985/1994 『新訂わらべうたであそぼう—乳児のあそび・うた・ごろあわせ—』明治図書.

1985/1994 『新訂わらべうたであそぼう—年少編・付文学あそび—』明治図書.

1986/1994 『新訂わらべうたであそぼう—年中編・付文学あそび—』明治図書.

1987/1994 『新訂わらべうたであそぼう—年長編・付文学あそび—』明治図書.

永田栄一

1981 『日本のわらべうた遊び 35』音楽之友社.

フォライ, カタリン, 知念直美 (編), 畑玲子 (訳)

1991 『わらべうた・音楽の理論と実践』明治図書.

ラボ教育センター (編), 百々佑利子 (監修)

1986 『マザーグースとあそぶ本』ラボ教育センター.

Andress, Barbara

1980 *Music Experiences in Early Childhood*. Holt, Rinehart and Winston.

1991 “Developmentally Appropriate Music Experiences for Young Children.” *Early Childhood Creative Arts*
pp. 65-73. National Dance Association.

Matterson, Elizabeth

1969/1991 *This Little Puffin* …… , Penguin Books Ltd.

Omi, Atsuko

1994 *Children's spontaneous singing: Four song types and their musical devices*. 『川村学園女子大学研究紀要』
第 5 巻第 2 号, pp. 61-76.

Sims, Wendy

1993 *Music in Prekindergarten: Planning & Teaching*. Music Educators National Conference.